

英語教育の方法：リスニング

— 字幕無しで外国語（英語）映画を楽しみたいということ —

Teaching English: Listening

— Wishing to enjoy movies in English without Japanese subtitles —

小林悦雄

KOBAYASHI Etsuo

小林悦雄

KOBAYASHI Etsuo



Key words: 映画の英語、字幕無しでの聞き取り、リスニング
English movies, movies without subtitles, listening skills in English

Abstract

Many Japanese learners of English are learning English studiously, hoping that they will eventually enjoy movies in English without recourse to Japanese subtitles. It seems to be one of their dreams which they wish will come true after many years of hard toil.

In reality it is not easy to realize this dream.

In this paper, the author analyzes English words and phrases which he himself couldn't correctly hear or understand in some movies, by which he hopes he can find reasons for the difficulty in catching English words under certain circumstances. The reasons found in this way are still personal and not universally valid, and therefore must be examined and verified with more objective data, but as initial research in this area, the findings might be providing some insight with which further inquiry could lead to good teaching / learning techniques to improve Japanese learners' listening skills.

1. はじめに

「字幕なしで映画を楽しみたい」というのは、ほとんどの日本人英語学習者の達成したい夢のひとつである。

と、言い切ってしまうとあまりにも断定的かもしれないが、2008年にある大学生クラス40人に、次のような質問への回答を書かせたことがある。

「問。あなたの英語学習における実現したい夢はなんですか。いくつか箇条書きにしてください。(たとえば、英語の本を気楽に読めるようになること。よい発音で会話ができる、など。)」

このうち17人の学生が、「字幕無しで映画を見たい」と回答している。ほとんどではないが、2人から3人にひとりはそのように考えていることになる。言っている内容は同じ事ではあるが、念のために、そっくり同じ表現のものも含めて、この17人全員の回答を書き出してみると次のようになる。

1. 洋画を字幕なしで見られるようになること。
2. 字幕なしで観れる(ママ)ようになること。
3. 洋画を字幕なしで見れるようになること。
4. 英語で日本語字幕なしの映画を見れるようになること。
5. 映画で字幕なしの映画を見ること。
6. 字幕なしの映画を見れるようになること。
7. 字幕なしでイギリスの映画を見れるようになること。
8. 洋楽や海外のドラマ・映画を字幕なしで見れるようになる。
9. 洋画を字幕なしで見られるようになること。
10. 字幕なしで外国映画を観ること。
11. 洋画を字幕なしで見れる様になること。
12. 外国の映画を字幕なしで自分自身の訳し方で観れるようになりたい。
13. 映画を字幕なしで見れるようになりたい。
14. アメリカのホームドラマや映画を字幕なしでみるができること。
15. 映画が好きなので字幕なしで外国の映画を見られるようになること。
16. ディズニーの映画や歌が好きなので、それらを英語で聴いて解釈できるようになりたいです。
17. アメリカのドラマや映画を字幕なしで見られるようになること。

こうしてみると、この「字幕無しで映画が見られること(見れること?)」は夢というよりも日本人英語学習者の悲願であるようにも思える。筆者自身も、この悲願達成をどこまで成し遂げたかということを考えると、英語教育者として後ろめたい気持ちにもさせられるのであるが、果たしてこの日本人の英語学習者の悲願は今後の日本においてどの程度まで達成できるのかというこ

とに思いを馳せながら、科学的でない、客観的でない、一面的であるという誹りを十分予測した上で、筆者自身を被験者として、映画のせりふの聞き取りで困難な点とその理由について分析し論考してみようと思う。

2. 映画の英語の聞き取りの困難な点

2. 1. 聞き取れるせりふと聞き取れないせりふ

(1) 聞き取れない単語について

聞き取りにおいて、音の連鎖として聞いた瞬間にある単語や句として分節的に認識でき、綴りを思い浮かべることができ、しかもその単語の意味あるいは指示物を知っていることは、映画を字幕無しに分かるための大きな要素であることはまちがいない。

もちろん、その単語を全く知らなくても、また、知っていながら聞き取れなくても、場面や文脈で意味やその指し示している指示物に分かることはある。その場合その単語が完全には聞き取れなくても、その単語の意味が推測できるわけだから、映画場面の理解には支障がない。ただし、その単語の正確な発音、スペリング、意味がどこかで学習されない限り、その場面の単語と同一のものを別の場面で見たり聞いたりとしても、それがいつも分かるとは限らない。その単語なり句が個人的に内在化され、自らの語彙の中で音と使用場面、意味が結びついた汎用化された単語として記憶の辞書に登録されない限り、別の場面でその単語なり句を認識できない。ということは、映画を見て、ある知らない単語や句の意味や指示する物がその場面ゆえに分かったとしても、そこで学習がなければ習得されず、分からない単語のままに残ると思われる。

例えば、Oscar and Lucinda（1997）年に、次のような語句が出てくる。空欄は筆者が聞き取れなかった語で、最後のかっこ内は映画が始まってからの時間である。

Your own () drop. (00:03:14)

ところが、その語句はその場面を見ていると、ある種のガラスのおもちゃであるということとは分かる。実物が映像として見ることができるから、英語が聞き取れなくても何を指しているか分かる。これは、映画を楽しむ、という観点からは問題がない。しかしながら、外国語としての英語学習の観点からは、そういうふうに問題は解決されない。それは、この単語が別の場面で、何のヒントもないような情景で使われた場合に、果たして聞き取ることができるだろうか、ということ、たぶんに聞き逃す可能性もあるからである。さらに根本的な問題はこの単語が使われる場面がその学習者の人生に一度しか起こらないかもしれないということである。単語は言語学習の基本である。文脈の中で分かることを積み重ねるのが、幼児期の母国語の習得の方法である。

内容を楽しむという点では、英語小説の「読解」と同じで、ある場面に2つや3つの単語が

分からなくても、その情景がよく心象に残れば、そういう単語は無視して先に読み進んでいく。それでその小説を楽しむ上で困ることはない。しかし、学習という観点に立つと、そういう単語はたぶんいつまでたっても学習されない。故に、あるわかりにくい場面で同じ単語がキーワードとして出現した場合は、あるいは、単独でその単語が示されたときに、その意味を理解できない。その語彙は自分の記憶辞書の中で内在化され汎用化されていないのである。

(2) 聞き取れない単語が聞き取れるということ

聞き取れない単語が聞き取れることとは逆説的のように聞こえるが、映画を見ている時には時々起こる現象である。場面のヒントや学習者の知識と想像力あるいは文構成力が単語を聞き取らせることを可能にする場合がある。しかし何の予備知識もなければ、物理的には、聞こえない音や単語であったかもしれない。意味が分かっているために、その意味にあった単語を選択して聞き取ることができるということである。例えば、化学分野に造詣が深い人は、日本語で「ルパートの涙」という言葉を知っており、実物そのものも、それがどのような性質を持っているかを知っているかも知れない。そういう学習者にとって、英語での言い方を知らなかったとしても、「あ、ルパートの涙だ」と思った瞬間に、それまで英語で聞いたことのない Rupert's drop という単語を聞き取れることは大いにあり得る。

(3) 知っている単語が聞き取れても意味が分からない

(A) 文構造や単語の発想の違い

日本語の発想と違う文構造や単語の概念は、聞き取りの障害になると述べたが、そういう場合、単語が全部聞き取れても何を言っているのかははっきりとは分からない場合がある。たとえば、次のような例である。

- Little Black Book (2004)

He went on a picnic with this self-obsessed prodigy? (00 : 38 : 25)

この二つの単語が表す意味はなんとなく分かるのだが、はっきりしない。辞書的な語句をつなぎ合わせて、「自分に固執した神童」という日本語を作ってもすっきりしない。だいたい、瞬間的にそのような訳語を思いつかないであろう。悪口ということがわかればよしとする学習段階もある。単語が聞き取れていれば、そのうちに何らかの方法によってじっくりした意味が取れるようになるかも知れない。また、文脈の中では、この人物は、女医であり、本も出しており、その表紙に自分の顔を載せているから、「天才ナルシスト」、「うぬぼれおりこうさん」とでも意味が取れば、この語句が英語として分かったと言えるが、時間軸に沿って流れる映画の中では、そのような理解のプロセスが取れるだろうかということである。もちろん self-obsessed という単語は辞書にあるではないかと言ってしまえばそれまでのことで、日本人英語学習者は、映画に使われる

単語をすべて学習しておけば夢はかなえられるということになる。

(4) ひとつの単語が聞き取れないために、全体の意味がわからない。

たった一語が聞いたことのない単語であったため、その文の言っている肝心なところがわからない、そして、その場面の状況がはっきりと分らない、という例である。同じ映画であるが、次の例はどうだろうか。

- Little Black Book (2004)

Hey, Stace? Would you wear a () in front of your boyfriend's parents?

(00 : 44 : 23)

女性がボーイフレンドの両親の前で着るには憚れるなにかであろう、ということまではわかる。文法的に考えれば、不定冠詞の a があるから、何か単数のもので身につけるもの。映画館では、こういう場合、音が聞き取れた場合でも、そうでない場合も、その文と場面のヒントを用いて、自らのすべての想像力を使って、瞬間的に、解答をさがすのであるが、答えが見つからなくても、否応なしに次の画面に移らざるを得ない。

(5) 意味と綴りは分からないが、音だけが記憶に残る。

(4)と似ているのだが、(4)が音としても不確かなのに対して、たまたま文尾の単語でありながら、その音は聞き取れたものの、そこから綴りが類推できない。また、場面からも意味解釈のためのヒントが得られないため、音は聞き取ったと思うので、辞書で探すのであるが、どうしても見つからない。単にカタカナの音として聴覚記憶に残る例である。

- Click (2006)

Mother : You have no idea, but, honey, please stay off the (ボンパイ).

Son : I can't promise that. (1 : 36 : 46)

なぜ、この単語が見つけれなかったかを自己分析してみると、まず、知らない単語であるということは言わずもがなであるが、英語の綴りを考えると、bonpie あるいは bompie という綴りが考えられる。P という破裂音の前だから、bom の可能性は高い。しかし、bon pie も born pie も balm pie もさらには、bomb pie も辞書にはない。最後の手段として日本語字幕をみると、「マリワナはこれきりにして」「それは無理」とあった。筆者の語彙にはマリワナに関するものは hemp, grass, pot, marijuana くらいなものであり、これでもヒントにならない。

さて、日本語母国語話者の英語聞き取りの上で苦手な発音に、末尾の子音があるのだが、思い直して、画面にもどって発話者の唇の動きを見ると、「パイ」のところで、最後に唇がしっかり閉

じている。もし、「パイ」だとすると、母音で終わっているから唇は開いて終わらなければならない。そう思って聞き直すと、確かに破裂音の p が聞こえる様な気がする。とすると、これは、bom pipe ということであろうか。そう考えるとかすかに p 音で終わっているような気もする。

そして、「ボン」で思い当たったのが、日本語の「でんでん虫」と「だんご」の「ん」である。日本語にはどちらも「ん」であり、たとえば、ban と bang の区別は日本語母国語話者は、ほとんど聞く上では、区別不能であることが多い。前者は「n」音で、後者は「ング」音なので、敢えて違いを強調するには、前者を「バンヌ」という発音になるくらい、舌先を上歯の裏側にくっつけば良いのだが、それは、発音をするときであり、いずれにしろ、日本人には、ban と bang をあまり強調しないで発音された場合には、分かりにくいのではないと思われる。一般的に言えば、語尾の子音は聞き取りにくいと思われる。そのような試行錯誤を経て、ようやく辿り着いたのが bong pipe であった。この bong pipe がどの程度の割合で英語の母国語話者の間で理解されているのかは不明だが、音として正確に聞き取れたとしても、(4)の thong と同様、学習者にはつらい単語である。

(6) 違った単語として聞き取ってしまう

聞き取れたと思った単語が実は、違う単語であった場合は、映画の理解を損ねる。筆者には次のような場面がある。カッコ内は、筆者が聞き取ったと思った単語である。

- The Good Shepherd (2006)

You forgot your (hand). (00 : 10 : 11)

「手を忘れる」というのは、何かのイディオムかと思い、電子辞書に手を伸ばしたら、ちょうど 10 秒後に、カメラが追ったテーブルの上には帽子が映し出されたので、hand から hat へと解釈を訂正できたのだが、これは、字幕なしで英語を理解したことになるのだろうか。残念ながらそうではない。映画を楽しむ、という観点では、10 秒後の画面で英語がわかったのであるからよしとしても、もしその画面が出なかったらどうか。こんな明らかで、しかも子供さえも知っており、日本語の文脈でもそのまま使われる「ハット」という単語の発音を聞き間違える方がおかしいと言われればそれまでだが、[t] 音と [d] 音の類似、そして [n] 音が日本人に聞き取りにくいことを踏まえて、はたして特定の人の特異的な聞き間違いであろうか。上記(5)と同じように語尾の子音の問題も関わっているかもしれない。知っている単語も実は聞き取れない場合があるということになる。

2. 2. 分かりやすいせりふと分かりにくいせりふ

(1) ゆっくり、間をおいて、はっきり話される英語は解読しやすい。

聞き取りとは、文を構成している単語を聞き取る能力プラスその文を解読する二つの能力であ

る。聴解能力であるから、「読む」というのは変だ、と考えられるかも知れないが、聞いた文を頭の中で読むことができるかどうかは、単語を聞き取れたかということと同じであるから、後はその意味を処理する大変良い条件を得たということである。当然、この場合、解読する時間が大きな要素となる。遅いと、映画の画面は次ぎに移り、流れに乗っていけないかも知れない。これは、英語で会話をしているでも起こりうることで、話された文が文として認識され、さらにそれを意味解釈するまで、二、三秒遅いタイミングで理解されることがある。あるいは、もっと後になって、3時間後あるいは翌日になってその文が状況と伴にようやく理解され、単なる音声のつながりだったものが分節化することがある。場面と文と意味の統合が遅れるということである。

ある意味では、それは、本を読んで個々の文をどのくらい早く意味解釈して理解するかということと同じ過程である、と筆者には思われる。幸いなことに、本を読む場合には、その状況を表すのにかかなりの文が用いられておりそれがヒントとなるし、また、わかりにくい文は何度も読み返し、それでも理解できないときにはさらに前に戻ることもできるし、また、読み進むうちに新たなヒントが現れて、一カ所が分からなくても気にならない。聞きとりはそうはいかない。

せりふが話されるスピードであるが、たとえば、「Pollock (2000)」で、主人公である画家（ポロック）がラジオ番組に出演して、芸術とは何かについて答える場面がある。ラジオ番組なので、司会者も意識的にゆっくり話すのだが、ポロックも、数語ずつ区切りながらゆっくりと話す。ひとつの文が、彼の思考に従っていくつかの語からなる句で少しずつ語られ、そこではかなり長い間が置かれている。むしろ、司会者の話す速度が速いため、あるいはそれが普通の手速かもしれないが、司会者の質問のことが聞き取りにくいところからも、スピードが聞き取りの難易に影響することがよく分かる場面でもある。とはいえ、その区切られた句がくっついて速く話された場合には、弱形アクセントの語すなわち機能語は聞き取りにくいことは変わりがない。たとえば、最初の何回かの聞き取りでは関係代名詞の that など筆者が聞き落とした語をかって（ ）に入れてある。〈 〉は聞きまちがいを訂正したものである。区切られたまま文を並べると次のようになる。

- Pollock (2000)

ラジオ司会者：Mr. Pollock, in your opinion, what is the meaning of modern art?

ポロック：Modern art, to me (1:19:30)

is nothing more than the expression of the contemporary aims of the age
(that) we're living in.

ラジオ司会者：Did the classic artists have any means to express their age?

ポロック：Yes, and they did it very well.

All cultures have had means and techniques of expressing their immediate
aims.

The thing that interests me is that today painters do not have to go to a

subject matter outside of themselves.

They work from a different source.

They work from within.

It seems to me that modern artists cannot express this age: The airplane, the atombomb, the radio, (in) old forms of the Renaissance or any other past culture.

ラジオ司会者：How do you go about getting the paint on the canvas? I understand that you don't use brushes or anything of that sort.

ポロック：I paint on the floor.

That's not unusual.

The Orientals did that. Most of the paint I use is (a) liquid flowing kind of thing.

The brushes I use (are) used more (as) sticks.

The brush (brushes) actually does (do) not touch the canvas,

They're (but) just about (above) it.

ラジオ司会者：Well, isn't it more difficult to control, and isn't there more of a possibility of getting too much paint or splattering any number of things.

ポロック：No, I don't think so.

With experience it seems possible to control the flow of the paint to a great extent and I don't use ...

I don't use the accident 'cause I deny the accident. (1 : 21 : 59)

哲学的で内容的には難解だと思われるのに、一語一語が切って発音され、高校までの英語教育を終えた平均的な日本人の耳にもすべての単語がひとつひとつはっきりと認識されやすい。また、ひとつひとつの単語の間に間があり、語と意味との連合、文としての理解、すなわち頭で読む「読解」を助ける要因がある。無論、これだけゆっくり話されて、単語はすべて聞き取れても、難解な箇所はあり、contemporary aims や immediate aims は、英語で捉えようとしても理解できないし、日本的発想ですぐ分かるぴったりとした訳も思い当たらない。

次の映画 (Bruce Almighty 2003) と比較してみたい。この場面でも、ひとつひとつの文が比較的長い間で区切られており、背景の雑音もなく、話されているのでわかりやすい。具体的にいうと、文と文の間には、およそ、2秒くらいの間がある。また、一つの文でも、句と句の間にはポーズが置かれていて、比較的「読解」がしやすい。また、10語くらいの分は、「お祈り」のことばであるので、3語くらいに切って話されている。そういう意味では、この映画の中でも大変わかりやすい場面である。しかし、Pollock と違う点は、その3語くらいがひとつひとつはっきり発音されるのではなく、時に弱くまた、一気に早く発音され、単語の間に全く切れ目がなくくっ

ついてしまっている点である。

文の構成も一文に5, 6語の構成で文型も単純なものである。ふたりのせりふの間には、かなり長い間がある。また、ひとつひとつのせりふは ゆっくり話される。しかし、部分的に聞き取りにくいところがある。それはかつこの空欄で示してみたが、筆者が何回か聞き直して、聞き取れた部分と聞き取れない部分があった箇所であるが、その文全体ををかつこの空欄としておいた。その音だけを書くと、(B) tothewol とか、(C) quibraggin (D) whya (E) wolreat, (F) sheservedfmme のような音の連鎖として聞こえてしまう。単語として分節化できないのである。to the world などよく聞けば聞けないはずがない句であるが、ここでは神のせりふで強勢が置かれていないために聞き取りにくい。「掘ったイモいじるな」が What time is it now? であるようなものかもしれない。

- Bruce Almighty (2003) (せりふは、Bruce → God の順番となっている。)

Bruce : Am I? (1 : 26 : 30)

God : You can't kneel down in the middle of the highway ^(A) () () () () () () , son.

Bruce : But why? Why now?

God : Bruce, you have the divine spark. You have the gift for bringing joy and laughter ^(B) () () () . I know. I created you.

Bruce : ^(C) () () .

God : You see. That's what I'm talkig about. That's the spark.

Bruce : ^(D) () () () want me to do?

God : I want you to pray, son. Go ahead. Use them. (Giving him the prayer beads.)

Bruce : Lord, feed the hungry and bring peace to all of mankind ... How's that?

God : Great ... If you want to be Miss America.

Now come on. What do you really care about?

Bruce : Grace.

God : Grace? You want her back?

Bruce : No. / I want her to be happy ... / No mater what that means / I want her to find someone / ^(E) () () () her /with all the love/ ^(F) () () () () ... / I want her to meet someone/ who sees her always /as I do now ... / through your eyes.

God : Now, that's a prayer.

Bruce : Yeah?

God : Yeah. It's good.

Bruce : It's good.

God : I'm going to get right on it.

〔(A) and live to talk about it (B) to the world (C) Quit bragging
(D) What do you (E) Who will treat (F) She deserved from me〕

(2) 論理あるいは意味解釈のための発想の違い

最初の空欄 (A) の筆者の聞き取れない部分は、字幕で確認すると次の単語である。

You can't kneel down in the middle of the highway (A) (and) (live) (to) (talk) (about) (it) , son.

この部分が聞き取りにくいのは、これがこの場面の一番冒頭のせりふで、まだ、神と Bruce のお祈りの場面ではなく、普通のスピードで話されているため、その比較的早いスピードが原因であるのがひとつだと思われる。

スピードに関して言えば、live to talk のつながりが、ひとつの音節かのように融合されていて個々の単語が識別しにくい。英語の「l」音は比較的強い音であり、live が単独で現れれば聞き取りやすい単語のはずであるが、この場合、talk の方に強勢が置かれ、live to のつながりが耳で識別しにくい。むしろ、はるか前の kneel に影響されて、kneel to talk about it にさえ聞こえてしまう。

しかし、もう一つの重要な理由は、この文の持つ英語の論理あるいは発想が日本人に理解しにくいためではないかとも考えられるのである。

この観点からすると、例えば次のような文は、日本語を母国語とする人には分かりにくいのではないだろうか。

You can't have your cake and eat it too. / You can't eat your cake and have it too.

この分かりにくさの理由として、文の構造的発想の違いが聞き取りに影響している可能性が考えられる。「ケーキを食べて、なおかつそれを持っていることはできない」という文の構造的発想は日本語では分かりにくい。「ケーキは食べたならそれでもないんだよ」という and でつなぐのではなく、if や so でつなぐ日本的な文構造、You can't eat cake if you have eaten it. とか、You ate the cake, so you cannot have any more cake. というような文なら、分かりやすい。

先に述べた映画の場面で言えば、さしずめ、

You can't live to talk about it if you kneel down in the middle of the highway. とか、If you kneel down in the middle of the highway, you can't live to talk about it. などの構文的発想

なら分かりやすい。

もし、その発話と同じ文の構造的発想が聞き手にあれば、聞こえないと思っていた単語が実は「論理的な推測で」分かることはないであろうか。つまり、意味が先にあって、あとから聞こえていない単語や文が推測される、ことがあるのではないかと思われるのである。

(3) 場面とせりふが矛盾する

場面や文脈に有効なヒントが見つけれず、聞き取った単語からもその文脈での意味を想像できず、また、その発話された文が文脈や画面に意味を与えることができない例として、次の場面はどうであろうか。知っているはずの単語が聞き取れない例でもある。

- Made of Honor (2008)

I can see () () (). (00:04:52)

この2番目の台詞は、I can see through your nightgown. であるが、じっさいには、この男性がいったことは通りに、相手の寝間着が透けているかということ、そんなことはない。ふつうのTシャツのようなもので、この台詞は場面理解のヒントにならない。それゆえ、場面のヒントに基づいた聞き取りができないから、何を意図しているかわからない。これが、場面が文字通りならば、see through か、nightgown という単語が意味を持って「聞こえた」はずである。

いずれにしても、なぜ、よく知っている単語なのに、そのような文中の一部の単語が聞き取りにくいのかということ、一つには、全体的に、ゆっくり話されているのに、その箇所だけスピードが上がり、3つくらいの語群が「ぐしゃ」と押しつぶされ、いわゆるリダクションとアシミレーションによって、一語一語独立して聞こえないために、聞き取り困難が生じるからだと推測される。さらにそういう状況でも、聞こえた音の断片から何とか全体を回復しようとしているのであるが、場面の状況がそれを助けてくれないのである。

3. 分かる人には分かる。分からない人には分からない。

3. 1. 頭の中で聞き取った英語の文を読む。

非ネイティブ英語話者である日本人学習者でも、その単語が聞き取れて、文法的に解釈できれば、句と句の間あるいは、文と文との間に十分な間がありさえすれば、逐次的に翻訳可能で、よく理解できる可能性が高まる。そうでない場面は、聞いた文章が文字として頭で認識されない、あるいは、認識されたと思ったとたんに、次の別の台詞が話され、別の場面に切り替わり、せっかく認識したそれまでの文章を頭で読んで翻訳あるいは意味を取るという過程を経ることができ

ない、ということである。間がないということは、解釈の時間を与えられないために、理解が阻害される。故に、映画が聞いて分かるというのは、音声を聞いて、個々の単語の連鎖が分かり、文が頭で読め、それを意味的に解釈できる文法力と、場面との結びつきで状況がわかるという、いくつかの要素が組み合わされた上での、分かるということである。そこに、満足な解釈に至るまでに要する「時間」すなわち「間」という要素が加わる。

ここから、導き出される、問題の解決法、すなわち、映画を字幕なしで分かるためには、何が必要か整理してみると次のようになる。

(A) 音の聞き取り → 単語・文として聞こえ、認識できる → 解読（意味解釈） → 理解

(B) 音の聞き取り → 意味と直結＝理解

(C) 音の聞き取り → 単語あるいは文として認識できない → 解読不能 → 理解不能

(A)の過程で、頭で聞き取った文を読むという解読作業が必要とされないほど、すなわち音（単語）あるいは音の連鎖（文）と意味が直結している表現が多ければ多いほど、時間を節約して意味を捉えることができ、やがては(B)に至ると考えられる。

そのような直結表現の数量は、英語が母国語でない学習者間で学習量とその方法によって差異が生じてくるはずである。また、母国語話者は、そのような反芻して解読しなくても瞬時に理解できる表現を数多く習得していると考えられる。それらは、prefabricated patterns すなわち、プレファブ建築の材料のようにいつでも文の構成に利用しやすいちいさなまとまりになっているものもあるのではないか。（Hakuta, 1987 The Mirror of Language）

では、そのような表現を段階的に増やして行けば、ある一定の段階で、英語の字幕を見なくても映画がわかるようになるのであろうか。

答えは、理論的には、そうである、と筆者は考える。しかし、そういう表現パターンは無限ではないか。もし仮に有限だとしたら、そのパターンの数はどのくらいであろうか。百通りか、一万通りか、百万通りのパターンか。たとえば、次のせりふはそういうパターンの一体どれを習得しておけば、瞬時に理解できるのだろうか。

• Good Luck Chuck（2007）

Once the girl has been with you

To the next she will be true.（00：04：21）

単語はどれを取っても、中学で習うものばかりである。筆者は、何度も聞き直したが、何らかの呪いではあるが、音声からは意味を判読できず、字幕でも確認して、これがこの映画のもっとも大事な伏線であったのかと分かったのであるが、いまだにこの部分を一読しただけでは、意味処理が瞬時にできない。一度聞いただけではなおさらである。何度も繰り返すが、これが「分かる人には分かる。分からない人には分からない。」ということである。個人的な学習体験の積み重ねの結果、ということになる。

さて、この文の意味処理を不可能にしているのは、たぶん倒置の文型と true to のイディオムの解釈がしにくいためではないかと考えられる。後半は、To the next が瞬時に「次の人」という意味に捉えられるかどうかである。意味は、「次の人に、彼女は忠実になるであろう」であるが、ハムレットにも、“This above all, to thine own self be true” (Hamlet, 1:3) という同様なパターンがあるから、To 人 be true あるいは be true to 人というパターンは「誰々に対して忠実である」あるいは「男・女が相手に対して誠実である」という意味で、母国語話者にとってなじみ深いものなのかもしれない。前半後半を合わせると、「一度その娘があなたと一緒にになると、次の男の人に彼女は忠実になるであろう。」ということになる。

ここまでの意味解釈でも、表面的な意味を取ったわけであるが、さて、それを基に、瞬時に「なにを言っているか」理解できる「日本語を母語として高校までの教育を日本で受けた学習者」はいるのだろうか。もちろん、映画であるので、場面という文脈があり、セリふも次の台詞の一部であるから、つぎのような文脈を与えられれば、「分かる人には分かる」のであろう。

I'll hex you. You'll never be happy. (00:04:10)

Around you love'll fall like rain.

But you won't hold it.

Your heart will pain. (00:04:18)

Once the girl has been with you,

To the next she will be true.

残念ながら、筆者は、この場面から、30分ほど、話が進んだ時点で、ようやく、この呪いがもしかして伏線となっているのかと、その画面に急遽もどってきて、何度も聞いて字幕で確かめて、分かってきた経緯がある。それまでは、hex という語と場面からなにかのろいがかけられたな、とまではわかったものの、どのようなろいかについては気にも留めなかった。それでも楽しんではいったのだが。

学習者の英語の聞き取りの力の差異というのは、「分かる人には分かる」という個人差という差異である。英語教員は、この差異をどのように縮ませることができるのかを考えなければいけないのであろうが、筆者には、この「分かる人には分かる。分からない人には分からない」という当たり前の問題を解こうと考えて、本研究を始め、大量の映画を見たのであるが、未だに、どのようにしたら最も効果的でかつ普遍的な学習、教授法があるのか思案中である。

理解度は、場面と文脈によっても増すことは多いにあり得る。英語の音声聞き取れなくても、場面で言っていることがわかる、ということは常識的なことであるが、学習者はおそらく、場面や文脈でのヒントを文の再構成に利用しているのではないかと。ただ、それだからと言って、英語の文を聞き取ったと言えるかどうかについてはなんとも言えない。ひとつ言えることは、それで映画が楽しめたとしたら、それはそれでよいかもしれない。応用が利かないというのが問題とし

て残るのだが。さらに、正しい文を聞き取るためには、たぶん正しい文法の知識も必要なのだと
思われる。文法の知識が、聞き漏らした語や正しい文をを復元している可能性がある。

ある機械が故障した時に考えられる問題点あるいは原因と、それに対する解決方法がある程度
予測できれば、修理ができるように、字幕を見なくても映画が楽しめる方法はどのようなものか
という問題においても答が発見されれば、あるいは少なくとも学習という見地から検討されれば、
そしてそれが読む、書く、話すという分野でも行われているならば、大学教育においてもなお業
者テストの点数を上げることこそ英語力をつけるための最後の神頼みとする空洞化の英語教育を
避け、その教育機関の英語教員が与える最良の知識と運用能力と良識を与えることができるの
ではなかろうか。

3. 2. その他の「分からない」に関する、条件：スピードと文型解釈と慣用表現

聞き取りには英文読解能力も関わるという論を展開してみたが、実際にはそればかりではない。
物理的にどうしても聞き取れない語がある場合がある。2.2.(1)でも述べたが、特に早いスピード
で話された場合は、リダクションやアシミレーションが起こり、元の単語が復元できない。先に
挙げた「Pollock」のゆっくりとせりふが話されるのとは違った状況である。そういうくしゃつと
した場合には、文として使われている文型解釈さえも誤る。

たとえば、次のような例では、簡単な単語ばかりだが、なぜか聞き取りにくい。

- The Life of David Gale (2002)

Hate's no fun to () () () just () (). (01:14:23)

これも、聞き取れる人には聞き取れる。聞き取れない人には聞き取れないという類のものではあ
るが、ある程度その理由を類別化、普遍化することはできそうである。 正解は

Hate's no fun (if) (you) (keep) (it) just (to) (yourself).

である。字幕を見ると、なるほどと合点が行くのだが、聞いた瞬間の文を再現しても、聞き逃し
た語が多く、間違っ て捉えた語もありで、もちろん意味解釈もできるわけがない。また、ifの代
わりにtoを想定してしまったので、構文的に動詞を予測して、youという主語さえもたぶんにあ
えて聞かないという間違いをしているように思われる。

だから、聞き取る段階もある程度正確に単語が聞き取れる段階を経なければ読解過程に至
ることができないのである。先に述べた、

音の聞き取り → 単語・文として聞こえる → 解読 (意味解釈)

の過程の「単語・文として聞こえる」過程でつまづくと全体の意味解釈に影響を与えるというこ
とである。もちろん、何度も述べたが、文脈、場面でヒントが与えられると、単語の修復がなさ

れたりして、すべてを聞き取らなくても意味解釈がなされてしまうことはある。(hand / hat の例)

このような聞き取りの誤答例は、それこそ、英語学習者の数の一万倍もの数として存在するわけで、さらに、その英語学習者のレベルも異なるわけだから、そのようなものを分析する事自体途方もないことのように思えるのだが、長年学習を続け、何百本もの映画を字幕無しで見してきた英語教師でさえも聞き取れない箇所を分析することは、もしかしたら、日本人にとっての英語音声の聞き取りにくさ、聞き間違いの傾向と法則性のようなものを垣間見させてくれるかもしれないという期待もある。

あるいは無作為に選んだサンプルと同じで、比較の対象もなく、統計的にたくさんのデータを集めているわけでもなく、まさに主観的な自己分析で何の意味もないかもしれない。ただ、被験者としての筆者と他の日本人学習者との共通項は、言語学習臨界期までに、すなわち中学生頃までの間、英語圏で生活したことがない、そういう環境で外国での教育を受けたことのない、大学まで純粋に英語を日本語の環境の中で外国語として学んだ日本人ということだけである。

筆者の場合は、「It's fun to 不定詞」という文型を思い浮かべて、もうひとつの可能性である、It's fun if 節という文型を思い浮かべなかったのである。この様な固有の問題点がそれぞれの学習者にあるということである。

そのほかの単語で聞き取れなかった理由は、この部分は、両唇音 (p)、歯茎音 (t) のふたつの破裂音が重なり合って融合していることがおおきな理由である。また、Hate's fun if の部分では、fun の f 音と if の f 音とが重なりあい、二つの f を認識しにくくしている。

keep の p 音が唇の形だけで、実際の破裂音としては聞こえにくい。Keep it の最後の t も同じく、無音化された、口の形は舌先が上の歯茎にふれた子音である。これも、実際には音として発音されていないが想定された音となっている。語尾の子音の問題である。

さらに、keep it just to yourself の連鎖においては、just の t 音とそれに続く to の t 音が重なってしまうと同時に、yourself の self が強く発音されるので、your の発音が極端に弱くなり聞き取れない。

このような聞き取りの困難な理由について、新田晴彦氏は、生徒の解答を分析して、次のような傾向を示している。細かい分析と記述が必要だが、この洞察は非常に的を射ている。

- (1) 文章のひとつでも知らない単語があると全体が分からないと自分で決めつける。
- (2) 少しでも音が変わるとついてこれない。
- (3) 聞こえたままを書かず自分の知っている単語や表現に置き換えようとする。
- (4) 発話スピードに負ける。(映画英語教育のすすめ：p.109)

これに、筆者自身の聞き取れない理由の分析からつけ加えることは、if you keep it のような場合、そのつながりがあまりにも普通で慣用的でことさらはっきり発音しなくても、予想可能な表現や、イディオム的な表現は、あたかも一語のように大変早くしかも、アクセントなしに発話されるために、数語がぐしゃつとひとかたまりになって聞き取れない、という理由があるように思

われる。逆に考えれば、そのようなかたまりは母国語話者には、慣用的であり、「keepichaslf」のような音のかたまりのまま理解しているのであろう。

4. まとめ

2で述べた「Click」という映画の場面では、bong pipe というたぶん日本人学習者は大学でも学習しないであろう単語のために分からない、つまり知らないのと、その単語さえも音から類推することができず、その上に、Stay off the bong pipe. というせりふが前後の文と何ら脈絡がなく、場面のヒントも「麻薬」を連想させるものがひとつもなく、勘で意味を取ることができない、というように、複合的な困難さもある。単語を知っていても、場面から類推できないため、そのせりふも復元できないもうひとつの例としては、I can see through your nightgown. もあげた。

すなわち、聞き取りの困難さは、速いスピードのため、全部あるいは肝心な単語が聞き取れない、あるいは、数語が融合した発音が聞き取れない、さらに、文が複雑あるいは内容が難解で高速に意味解釈を処理しきれない、という常識的な理由に加えて次のような理由が考えられる。

- (a) 全く知らない単語だから、他の単語が聞き取れても、その単語だけ聞き取れないし、意味が分からない。それゆえ全体の意味がおぼろである。その理解度はあるいは曖昧度は0から99% くらいの間のどこかに来るのだが、100% にならない。(thong や bong pipe の例)
- (b) 発想的に異なった文型を瞬時に解釈できない。(To the next she is true.)

それと複合的に、

- (c) 母国語の音の干渉から、あるいは、母国語にない語尾の子音など発音のために、英語音の聞き取りができず、単語を認識できない。(hand / hat)
- (d) 場面や文脈のヒントの無さから、あるいは、文脈からは想像できないせりふのため、知っている単語でありながらもその音や単語や意味を聞き取れない。あるいは聞き取っているかもしれないが、再構成できない。これは知らない単語ならなおさらである。(I can see through your nightgown.)

上記のような困難さを助長させる要因が複合的に関連して、日本語を母国語とする英語学習者の弱点になっているのではないか。あえて日本語を母国語とする英語学習者の困難点と限定したのは、筆者が日本人であり、特に、(c)においては、p と b の発音を区別しないような言語もあり、母国語の違いによって英語音の聴解能力に差異が現れると想像するからである。これらの理由は、依然として仮定の段階であるので、さらに客観的データを収集して、次回の継続研究で検証する予定である。

英語教育における映画の利用についていえば、たとえば単語や表現を例にすると、母国語としてならば小学校までに何百回何万回と経験するかもしれない単語や表現の自然修得の場面のうちの、ある偶然の一回だけ、あるいは数回の修得場面を、母国語話者でない視聴者に「音声と場面とともに」提供しているという点で貴重なのだと思われる。そういう修得が英語教育で根気よく

繰り返されて、よい教師に巡り会い、運良くなされれば、汎用的な聴解力と自信をもつことができるようになるのであろう。

【付記】

本研究は、「言語教育のための外国語映画に現れる表現と場面の資料集作成の試み」の研究テーマで、2008年度立教大学異文化コミュニケーション学部プロジェクト研究費の補助を受けて行われた。

参考文献

- 藤枝義之 監修 映画英語教育学会 / 関西支部 (2005) 『音読したい映画の英語』フォーイン スクリーンプレイ株式会社
- 藤枝義之 監修 映画英語教育学会 / 関西支部 (2007) 『暗唱したい映画の英語』金星堂
- 角山照彦 (2008) 『映画を教材とした英語教育に関する研究』ふくろう出版
- 亀山太一、他 (2001) 『DVD 映画英語学習法』スクリーンプレイ出版
- 中谷安男、八尋春海 編集 (2003) 『映画英語教育論』スクリーンプレイ出版
- 新田晴彦 (1994) 『スクリーンプレイ学習法』スクリーンプレイ出版
- 斎藤兼詞 (2004) 『映画の英語がわかる本』小学館文庫
- スクリーンプレイ編集部 (1995) 『映画英語教育のすすめ』スクリーンプレイ出版
- 吉成雄一郎 (1997) 『映画を英語で楽しむための7つ道具』スクリーンプレイ出版
- Hakuta, Kenji (1986) *The Mirror of Language*, New York, Basic Books